



館長だより

山形県産業科学館

令和 8 年 2 月 25 日(水)

発行 館長 加藤 智 一

茂吉忌

歌人であり、精神科の医者でもあった斎藤茂吉がこの世を去って 73 年が経ちました。亡くなられたのは、1953 年（昭和 28 年）2 月 25 日です。歌集「赤光（しゃっこう）」の中でも最も強い情念が刻まれた部分、連作の「死にたまふ母」は、母の危篤の知らせを受けて故郷へ急ぎ帰り、臨終を看取り、葬送し、その後の心の痛みまでを時間順に描いた短歌群です。その内容は、（その 1）～（その 4）に分かれていて、（その 1）東京で危篤の知らせを受け、夜行列車で山形へ向かう（その 2）母の枕元に寄り添い、死の瞬間を迎える（その 3）葬儀・火葬の場面（その 4）酔川温泉で心身を癒やししながら、母の死を受け止めようとする場面となっています。この連作の中で最も印象に残っているのは次の一首です。「のど赤き玄鳥（つばくらめ）ふたつ屋梁（おやばり）にゐて 足乳根（たらちね）の母は死にたまふなり」。ツバメの鮮やかな生命感と、母の死の静けさが対照され、茂吉の写生と情念がもっとも鮮烈に表れた歌です。

日常の茂吉は、怒りっぽく、頑固で、しかしどこか憎めない温かさを持っていたと言います。長男・茂太（もた）氏が「雷親父」と呼んだほどの激しさは、家庭内では恐れられましたが、外に出ると一転して極端に丁寧な対応をするという二面性もありました。このギャップこそが、茂吉という人物の魅力を象徴しているとも言えるでしょう。

茂吉の人生において最初の危機は、意外にも「方言」であったと聞きます。山形の金瓶村から上京した若き日の茂吉は、東京で自分の言葉が通じないことに衝撃を受けました。医師を志し、一高から帝大へと進むエリート街道の途中で、彼は自分の出自と向き合うことを余儀なくされます。のちに彼の短歌に繰り返し現れる郷土への強い愛着は、この「言葉の疎外感」を乗り越えた経験と深く結びついているように思えます。そして、精神科医としての苦悩も垣間見ることができます。「赤光」には、患者の自殺に心を痛める若き医師の姿が刻まれています。「わが患者（いたつき）の 自殺（みづからころ）ししとききし 夕（ゆうべ）の空のあかさよ」。また、茂吉の人生には、家庭内の激しい葛藤もありました。妻との不和は有名で、のちに夫婦は破局に至りますが、その過程は壮絶だったと言います。しかし一方で、

恋人との往復書簡が残されていることから、怒りっぽく頑固な男が、恋の前では驚くほど繊細になれたようで、その落差は、彼の歌の魅力をさらに深めています。「死にたしと いひし恋人（こひびと）いまはなき わが胸いたく 思ひいでらゆ」。そして戦後、敗戦は、茂吉に深い精神的打撃を与えました。しかし、老境に入った彼は、静かに自らの内面を見つめるようになります。晩年の歌には、若き日の激しさとは異なる、澄んだ諦観と温かさが漂います。「僕は老残の身をいたはりつつ せいーばいの為事をして この世を去りませう」。人生を受け入れ、なお歩み続けようとする静かな覚悟が感じられます。

茂吉の逸話をたどると、彼が決して「文豪然とした完璧な人物」ではなかったことがわかります。怒りっぽく、頑固で、恋に溺れ、方言に悩み、仕事に追われ、人生の危機に何度も直面しました。しかし、そのすべてを抱えたまま、彼は歌を詠み続けました。むしろ、その「人間臭さ」こそが、彼の歌に、深みと温もりを与えているのだと感じています。



楽天トラベル 25 年人気上昇ランキング

天童温泉一位

山形新聞 2026. 2. 25 によると、昨年 1 年間に楽天トラベルで予約があった延べ宿泊者数を前年と比較し、伸び率を温泉地ごとにランキングした結果、延べ宿泊者数が前年比 1.7 倍となった天童温泉が全国一位となりました。

天童温泉は、オールインクルーシブサービスを提供する宿泊施設のオープンや周辺の道の駅、果物狩りができる果樹園、蔵王の樹氷など、広域な周遊の拠点としても利用されており、交通の利便性が高いことも要因となっているようです。